

Special Need Education Research Center

SNERC通信

(第31号－2014年1月)

国立大学法人 筑波大学
特別支援教育研究センター
センター長：四日市 章
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
TEL&FAX：03-3942-6923
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>
mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp

「教材・指導法のデータベース構築に向けて」

筑波大学特別支援教育研究センター 左藤 敦子

今年度より、附属特別支援学校5校の連携のもと「教材・指導法のデータベース構築」の研究が本格的に始動しつつあります。現在は、5部門会議を中心として、附属特別支援学校5校の先生方の力を結集している段階ですが、今後、より多くの先生方に関心を持っていただけるように、知恵をしぼっているところです。

5部門会議では、データベース構築の第一歩として、どのような内容をデータベースに盛り込んだらよいかという外枠を検討しています。各学校から持ち寄った教材を題材として、視覚



障害教育、聴覚障害教育、肢体不自由教育、知的・発達障害教育、自閉症教育という幅広い視点から、その教材のねらいや特徴、持ち味、活用方法などについて意見を交わしています。ちょっと角度をかえてみると、同じ教材に違う意味をもたせることもできるということや、教材が準備されただけでは教材に秘められている十分な真価を発揮することができず、どのように活用するのか、どのように教えるのかということは切り離して考えることはできないということについても改めて感じているところです。「なんだろう？」「どうしてだろう？」と子どもが考えて、発見をして、いろいろと試してみてもう一度考えて、ひらめいて、「今度はこうしてみたらどうだろう？」「あれはなんだろう？」と工夫してみる…一つの教材を入口として、子どもの「知の世界」が広がっていくプロセスを垣間みるようで、とても貴重な機会が得られております。

冒頭にありますように、データベース構築に向けての準備が進むと、先生方にもデータベースにのせていく教材・教具や指導法についてご協力いただくことになるかと思えます。まずは、データベースをかたちにしていくことが先決ですが、ゆくゆくは、教材・教具や指導法の情報を寄せていただくだけではなく、附属特別支援学校5校の先生方が意見を交わし、連携できる場として「教材・指導法のデータベース」が発展していくように努めてまいりたいと考えております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

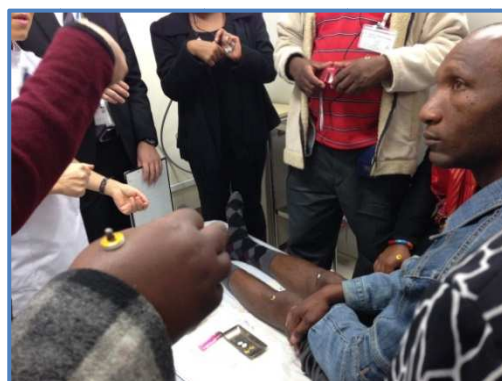
■JICA アフリカ地域研修 「障がいのある子どものための授業づくり」



11月17日～12月14日、アフリカ7カ国から10名の研修生が訪れ、筑波大学と附属特別支援学校、公立学校にて研修を行いました。ご協力いただきました皆様、本当にありがとうございました。ここでは、附属特別支援学校での研修の様子をご紹介します。

視覚特別支援学校（11月21、22日）

11月21日（木）と22日（金）の両日、附属視覚特別支援学校にJICAアフリカ研修生10名が来校しました。当日は幼稚部から専攻科までの授業参観及び視覚障害教育に関する講義が行われました。研修中は、視覚障害教育の指導実践だけでなく、当校に設置されている治療室での灸の体験や、昼食時の生徒との交流もあり、たいへんバラエティに富んだ研修となりました。



聴覚特別支援学校（11月28日）

アフリカ7カ国の方々は本校幼稚部、中学部、歯科技工科を中心に参観されました。幼稚部では聴覚障害児における早期教育の重要性についての講義を興味深く聞いていらっしゃいました。また中学部では、生徒がアフリカの国々について調べたことを英語で話したり、参観者に質問をしたりするなどして、とても有意義な交流ができました。最後の歯科技工科では参観後、特製の『ミニ義歯のストラップ』をプレゼントしました。お客様は大喜びでした。



久里浜特別支援学校（12月4日）

附属久里浜では、玄関にて小学部の全児童が7カ国の旗を持って出迎えました。子ども達が「ハロー」と挨拶をすると、笑顔で答えてくれる研修生の皆さん。その後の幼稚部の授業見学では、子ども達と輪になって一緒にダンスを踊り、なごやかな研修となりました。



＜旗を持って歓迎する子ども達に笑顔で手を振る研修生の皆さん＞

＜幼稚部でのダンス＞

大塚特別支援学校（12月6, 9日）

大塚では今年度当初から、アフリカの音楽やダンスの学習をしてきました。当日は貴重な交流の機会に、お互いが「本物の」文化に触れることを大切にしました。モロッコの先生が民族衣装を着てダンスを教えて下さり、皆で一緒に盛り上がりました！大塚の児童と教員は、箏の演奏で歓迎。給食では子ども達を手本に、箸にチャレンジした研修生の方もいました。各部参観、教材や指導法の講義も好評で、お互いにとって学び多き研修となったと思います。言葉で伝え合うことは多くなかったけれど、音楽やダンスや教材は言葉の壁を越え、気持ちの通い合う交流ができました。



桐が丘特別支援学校（12月10日）

12月10日（金）アフリカから見た10名の研修生が桐が丘特別支援学校を訪れました。午前中は、学校概要の説明後、小・中・高・施設併設学級の各部から、算数、国語、理科、体育、自立活動、学校設定教科（職業生活と進路）など7つの授業を英訳された指導案を手に参観し、午後は、肢体不自由児の算数指導、自立活動指導の考え方、ICTの活用についての3つの講義を受講されました。昼には、各教室で一緒に給食を食べながら子どもたちとの束の間の交流を楽しんで頂きました。あいにく雨天で寒い日でしたが、研修生の皆さんの熱心さに寒さを忘れる1日でした。



■平成25年度 新規連携研究

今年度は、以下の2件の連携研究がスタートしました。

「知的障害児・肢体不自由児への効果的な食育推進プログラムの開発」

研究期間：平成25年度～平成27年度

研究代表者：土田 裕美（附属大塚特別支援学校）

青山 妙子（附属桐が丘特別支援学校）

「特別支援学校におけるタブレット端末を活用した教材についての研究」

研究期間：平成25年度～平成27年度

研究代表者：白石 利夫（附属桐が丘特別支援学校）

宮崎 善郎（附属視覚特別支援学校）

根本 文雄（附属大塚特別支援学校）

■現職教員研修生日記



静岡県立袋井特別支援学校東遠分教室

清水 一美

4月から、筑波大学特別支援教育研究センターで研修をさせていただき、半年以上が過ぎました。附属特別支援学校5校での演習、センターでの講義、大学での聴講に加え、附属大塚特別支援学校での実習と盛りだくさんの研修で、半年前の自分からは想像もできない程、たくさんのことを学ばせていただいています。また、藤原先生に御助言いただきながら所属校での実践を重ねる中で、授業者の先生方と一緒に授業を作っていく楽しさを、少しずつ感じられるようになってきました。

研修では、今までがむしゃらに取り組んできたことの理論的な部分を改めて学んだり、最新の情報に触れたりでき、とても有意義でした。このような機会をいただき、現場を離れているからこそ、得ることのできるものもあるのだと実感し、感謝しています。

残りの3ヶ月はテーマ研修のまとめの時期となります。新幹線での時間を睡眠や食事にと有効に使って体調に気をつけながら、また、中間発表会の教訓を生かして仲間と励まし合いながら、まとめに取り組みたいです。そしてまとめにも取り組みつつ、残りの日々を大切に過ごしたいと思っています。



埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園

小林 茜

4月からの研修は戸惑いと迷いの毎日でしたが、先生方による講義や演習、附属特別支援学校への見学、他校への学校見学、自主研修など多岐に渡る研修から今まで知らなかった世界を知ることができました。研修のプログラムとしてこのような機会を作ってくださり、本当にありがとうございます。戸惑いの原因の一つに朝の満員電車があります。学校勤務の際は車通勤であったので、通勤ラッシュは貴重な経験の一つとなりました。特に女性専用車両は、座席を確保するために女同士の熾烈な争いが繰り広げられていて今でも太刀打ちできません。

2学期が始まり、10月の中間報告会に向けて研修内容をまとめ始めると、考えが整理されて明らかになる部分と、混乱し分らなくなる部分の両方が生じました。どの様にまとめれば良いのか迷い、伝えたいこと、考えていることを文字にすることの難しさを味わいましたが、指導教諭の先生方にご指導をいただき無事に報告会をむかえることができました。また、センターの先生方には事前の準備や当日の会の進行などで大変お世話になり、心より感謝を申し上げます。研修生5名、残り僅かとなった研修を全うできるよう、最後まで努力したいと思います。

